

- (c) 低気圧、ハリケーン、台風位置決定補助。
- (d) 海上の人命安全と貨荷保護に貢献。
- (e) 多くの海域での漁業操業を助ける。
- (f) 海空救助活動を助ける。
- (g) 気候学的研究を助ける。
- (h) 気象衛星企画を助ける。

この漁船報告用コードは各港の気象官から伝達されよう。補助気象報告船としての協力を望む。

(宇田道隆)

11 国際捕鯨委員会 (I.W.C.) 第13回会議

1966年6月27日～7月1日ロンドンで開催、北太平洋鯨資源管理などもとり上げた。1965/66年漁期には南氷洋で4,085頭(B.W.U=白ナガス単位)=2,300頭、ナガス鯨+17,600頭イワシ鯨)が捕獲せられた(前年漁期7,053頭B.W.U)。1966/67年漁期にはさらに3,500頭B.W.U.に減すことに合意したが、これでもまだ現在減っている鯨資源を保持するには多すぎる。1967～68年漁獲は(陸上基地でとる南氷洋鯨資源も入れて)資源維持量以下になるはずで、今後臨時的な漁獲減少でもつと生産的レベルに資源を回復するよう望んでいる。

(宇田道隆)

12 第2回FAOマグロ研究促進部会

1966年8月15～21日、東京で太平洋学術会議直前に開かれ、日本(中村広司、須田明両氏参加)、米、ナイゼリア、インド、豪、西、葡、仏、ラテンアメリカより来会、M.B. Schaefer 議長。この部会は1963年ラホヤの世界マグロ類生物学会議で設置され、第1回は1964年6月FAO(ローマ)で開かれた。(国際協力によつてマグロ類研究上の問題点を明かにし継続的に解決に努力し、漁業の効率を向上、マグロ資源の動向を示すのが目的である。今回結論は12の勧告を生んだ。

- (1) マグロ分類学：米国ニューヨークの国立博物館を主センター、仏バリの自然博物館、日本京大松原喜代松教授研究室を地域センターとする。卵、稚幼魚、マグロ魚体計測、北太平洋ビンナガ、クロマグロを日米協力研究、マグロ生態学、マグロ海洋学研究、
- (2) マグロ血液型による分類(ホノルルにセンター)
- (3) 稚魚分類、詳細な図解つけたモノグラフ作成しFAO出版。オレンジ色素(死ぬと消える)が重要な手がかりになる。マグロ類補充機構の作業グループができた。幼期マグロ生活史の空白の知識を埋めること。IATTCの規制海域のキハダが果して独立資源であるか不明の点を調査する。
- (4) 標識放流実験(キハダ、カツオ、クロマグロ、ビンナガマグロを優先的に)。情報交換組織

を Postel (仏) をコンピーナーとして設けた。

- (5) 標識を再検討することになった。
- (6) 漁獲量統計、努力量統計 (FAO に協力)。
- (7) 魚体組成は資源動向をみるに極めて重要。
- (8) マグロ漁業経済の研究。
- (9) 研究者交流、訓練教育 (FAO 援助)。
- (10) マグロ水中探査 (魚探利用資源の研究)。
- (11) . (12) 研究レビュー、図説等刊行物出版。

第 3 回会議は 1969 年大西洋岸プエルトリコで開く。

(宇田道隆)

13 「湧昇の生物学的効果」シンポジウム

出所：第 2 回国際海洋学会議 (モスコウ 1966 年 6 月 8~9 日)

Symposium on the Biological Effects of Upwelling
(コンピーナー: Currie)

- 1) Alan R. Longhurst (米国加大洋資源研究所、スクリップス海洋研究所): バハ、カリフォルニア西岸湧昇の生物学的研究

本報告は 1964 年以降スクリップス、マグロ海洋学グループ (ブラックバーン、トマス、ロングハースト、ロレンゼン) の熱帯マグロ夏季来遊時のバハ、カリフォルニア西方水域での調査による。カリフォルニア海流は本域沿岸より西方へ流出を続け、湧昇は年の前半においてバハ・カリフォルニア沿岸長にわたり表層水の発散によつて起るが、主として主要岬角に近接して起る。年の後半には湧昇は通常止まり、熱帯的海況を生じ、それは沿岸の北上海流発達と関連して起る。東部太平洋の表層下の酸素極小層は本域一帯に生じ、100m 以深の O_2 量はふつり極く少い。本海域での湧昇は熱帯水域中の不連続的湧昇から結果する富栄養水と食栄養水の希節的交代があるため本沿海の湧昇は特に水産上興味がある。本海域生物への湧昇影響は甚大で、特に経済的に重要な回遊マグロ類がそれによつて季節的豊栄養化 (Eutrophication) からくる有機物を摂取することができるようになる。湧昇期中の調査は、生物学的、物理学的諸性質が豊栄養水の表層舌状部をなして岸から沖へ流去する湧昇水の様子を明らかにした。湧昇状態中での時系列研究は栄養塩が急速にとり上げられ (吸収)、表層における硝酸塩、ケイ酸塩濃度は岸から離れた「高年湧昇水 (古い湧昇水、aged upwelled Water) 中に見出された。それらと相似な値にまでわづかに 5 日ぐらゐの間に減少していたこともあつた。栄養塩の「取り上げ」(Uptake) は植物プランクトンのすこぶる盛んな繁殖を伴い、主としてケイ藻類 (*Coscinodiscus*, *Chaetoceros*) で、このため受光層の深度がわづか 2~3m にまで減少する。ケイ藻類は草食性コペポダの 2~3 種 (*Calanus*, *Eucalanus*, *Rhincalanus*) によつて主に占められた動物プランクトン群聚に